

2016年6月2日

EAJRS 在欧和古書保存調査報告

安江 明夫
(EAJRS 和古書保存 WG)

EAJRS 和古書保存 WG は 2015-2016 年に、東芝国際交流事業団の助成を受け、EAJRS 在欧和古書保存調査を実施した。これは、1) 欧州各所図書館等に散在する貴重な和古書の保存のため、資料保存専門家が現地を訪問し、コレクションの保存状況等の現状を把握する、2) そのうえで調査報告書を各訪問図書館に提出し、以後の貴重書保存対策の改善に役立たせてもらう、ことを趣旨とする計画であった。

訪問調査を担当したのは EAJRS 和古書保存 WG アドバイザーの安江明夫（資料保存専門家）である。以下、調査訪問者の安江から調査の総括的報告を行う。

1. 訪問機関等

訪問機関は以下の 9 館である。これら 9 館はすべて 2014 年実施の「EAJRS 和古書保存調査」回答館であり、安江はアンケート調査回答結果を礎に訪問調査を実施した。

- 1) ベルリン国立図書館東アジア部所蔵和古書。訪問対応：Christian Dunkel。
- 2) チューリッヒ大学日本学部門図書館所蔵和古書。訪問対応：神谷信武、Sayako Bissig。
- 3) オスロ大学人文社会学図書館所蔵和古書。対応：矢部マグヌスセン直美。
- 4) ルーヴァン大学東方図書館所蔵和古書。訪問対応：Arjan van der Welf、W.F.Vande Walle教授。
- 5) ルーヴァン・ラヌーヴ大学所蔵和古書。訪問対応：Emilie Vilcot。
- 6) スロヴェニア学術・芸術アカデミー図書室所蔵和古書。訪問対応：重盛千香子、ナターシャ・ヴァンペリ＝スハドウニク（以上、リュブリャーナ大学アジア研究学科）、ペトラ・ヴィデ＝オグリ（スロヴェニア学術・芸術アカデミー図書室長）
- 7) ロンドン大学 SOAS 図書館所蔵和古書。訪問対応：小林富士子。
- 8) セインズベリー日本藝術研究所図書館所蔵和古書。訪問対応：平野明。
- 9) オクスフォード大学ボドリアン図書館附属日本研究図書館所蔵和古書。訪問対応：Izumi Tytler。

2. 訪問日程

上記 9 図書館を三次に分けて訪問調査した。

第一次調査訪問（英国）

2015年6月15日-21日

- ・ロンドン大学 SOAS 図書館（6月17日）
- ・セインズベリー日本藝術研究所図書館（6月18日）
- ・オクスフォード大学ボドリアン図書館附属日本研究図書館（6月20日）

第二次調査訪問（ベルギー）

2015年9月10日-15日

- ・ルーヴァン・カトリック大学東アジア図書館（9月11日）
- ・ルーヴァン・ラヌーヴ大学図書館貴重書室（9月14日）

第三次調査訪問（スロヴェニア、スイス、ドイツ、ノルウェー）

2016年2月18日-3月2日

- ・スロヴェニア学術・科学藝術アカデミー図書館（2月19日）
- ・チューリッヒ大学日本学部門図書館（2月22日）
- ・ベルリン国立図書館東アジア部（2月25日）
- ・オスロ大学人文社会学図書館及び同大学博物館（2月29日）

なお、訪問者のドイツ滞在中の2月26日に、ドイツ語圏日本資料図書館連絡会（Arbeitskreis Japan-Bibliotheken）の定期会合がライプツィヒで開催され、安江は、今次調査訪問の目的に即し、「在欧和古書等の保存」と題して講演した。

3. 調査の全体的概要

調査内容は、各館の所蔵和古書等の全体的状況、保存状態、保管環境、過去の処置と問題（虫損・かび、災害、盗難等）、現在の保存方針、体制、取組み等である。

調査実施にあたり、「EAJRS 在欧和古書保存調査実施要領」（別添）を作成して和古書保存WGとしての意思統一を図るとともに、各訪問機関にそれを事前に提供し、訪問機関と訪問者間の共通認識の醸成に努めた。

「実施要領」において、安江は以下を補足として記した。「本プロジェクトでは和古書コレクションの状態と保存の取組みに関する調査を主眼とする。しかし同時に、人の「健康診断」と同様に、各館の和古書管理担当者と調査訪問者との意思疎通により、訪問者は和古書コレクションの健康に関するアドバイスをし、あるいは担当者が一種の「気づき」を得ることを期待している。安心する、自信を得る、留意点あるいは改善すべき点を理解する、今後どのように取り組めば良いか誰に相談すれば良いかを考えるなど、和古書管理担当者が訪問調査を主体的に受け止め、その結果を活用することが肝要である。その意味で、調査訪問者の位置付けは調査者というよりカウンセラーに近いと考える。」

訪問調査中に訪問対応者と意見交換し、その後、意見交換の内容を訪問調査報告書として各人に送信した。

なお、以下では、1に示した図書館等の名称について、1)をベルリン、2)をチューリッヒ、3)をオスロ、4)をKU Leuven、5)をUCL、6)をスロヴェニア、7)をSOAS、8)をセインズベリー、9)をボドリアン、と略記して書き進める

本報告で記す和古書コレクションは、日本関係の古書、手稿、地図、版画、写真等を意味する。訪問した9図書館の和古書コレクションの規模、内容及びその取り扱い、体制等は多様であり、全体的に総括するのが難しい。多くでは日本語を解する担当者を配置しているが、そうでない図書館、和装本の扱いに不慣れな所蔵機関もある。コレクションは大学図書館、国立図書館蔵書の一部である場合が多いが、セインズベリーのよう独立した専門図書館の一部の場合もある。

このように訪問図書館の和古書コレクションの実状は多様であるが、概率的には、まず次を指摘することができる。

和古書保存の観点からは、9図書館を大きくは2グループに分けることができる。

第1グループは、和古書コレクションの規模が大きく、体制が整っている所で、このグループにはボドリアン、ベルリン、UCLが含まれる。そこでは、和古書の保存状態が良く、保管環境が良く、かつ目録整備、取り扱い、デジタル化・展示を含むサービス面においてしっかりした取組みがされている。またそれらの部署の親組織の保存の取組みが優れており、同部門と和古書保存部門との連携が円滑に行われている。

第2グループは上記以外となるが、そこでの和古書コレクションの規模は一般的にはさほど小さくなく、日本語資料等を担当する部署の体制が小さい。そこは言わば小規模

な専門図書館で、一人あるいは二人の司書が、日本語資料の選書、受入れ、整理、保管、利用者サービス等のすべてを担当しているのが一般的である。そのため、和古書コレクションの保存等が懸念されても、それに割ける時間はあまりない。こうした事情により、和古書保存に関連する課題が生じている。

以上を踏まえると、EAJRSとして、今後、特に重視すべきは上記の第2グループであり、それらの図書館の和古書コレクションを念頭に、次節に、現状についてのコメントと課題解決のための参考意見を整理して記す。

欧州にはこうした小規模の和古書コレクションを有し、かつそれに対する取組みが不十分な図書館が少なくない。以下の議論は、特にその種の図書館で参考にしていただければ幸いである。

4. 和古書保存の今後の取組みのために

4.1 資料保存は補修・修復でない

和古書コレクションの状態は、全体的に見て、比較的良い。虫・カビによる被害も、KU Leuven の新受入れ図書の場合を除いて、現在進行形としてはない。また総じて、利用が少ない（殆どない）ことにもよるだろうが、劣化損傷は少ない。

とはいえ、虫食い痕の著しいもの、和装本の綴じ糸が切れているもの、表紙がはがれているもの、題箋が外れかかっているもの、縦置きのために書架上で歪曲している和装本、などが散見された。

こうした劣化損傷あるいは不具合ある図書に対し、担当司書は懸念を抱き、古書・貴重資料であるゆえに課題を認識している。そのためであろうか、和古書コレクション保存の最大の課題を損傷資料の補修と考える向きが多い。2014年実施のEAJRS和古書保存アンケート調査結果でも、最も必要とされる保存の取組み（問7）は「補修などの保存処置」で「20館中8館」、日本の関係機関からの支援等で最も期待されているのは「保存処置」で「7館」であった。

傷みのある貴重な和古書を保存処置したいと考えるのは自然である。しかし、この方策については以下を考慮すべきである。

長い間、世界中のどこでも、保存と修復は、殆どイコールと見なされてきた。それに画期をもたらしたのが半世紀前のフィレンツェ水害で、その経験に基づく新しい資料保存の考えが、「IFLA資料保存の原則」（1979年版）として確立された。

そこでは「修復は資料に何らかの変更をもたらすので、できるだけ避ける」「修復はそれ以外の保存措置が無い場合の最後の手段である」の方針が示された。つまり、傷んだ貴重書に対する第一方針を「できるだけ修復しないこと」とした。この考えと方針は、現在、世界中の資料保存専門家の間で広く共有されている。

和古書コレクションに戻って考えると、仮に虫食いや傷みのある和本があるとして、それで不都合があろうかと自問することが必要である。一般に和古書の利用は少なく、かつ閲覧も図書館内に限られている。しばしば利用されるようなら複製（マイクロ化、デジタル化）を企てればよい。つまり、もし虫食い、傷みのある本が、そのために一層、劣化損傷が進むのであれば、補修する必要はない、と考えて良い。

資料展示の場合も、丁寧に注意して扱えば、傷んだ和古書でも展示は難しくない。和装本の素材である和紙と墨は、安定性が高いことにも留意しておくべきである。

参考：木部「表紙は外れたままでよい」http://www.hozon.co.jp/report/post_8842

4.2 ケアと取り扱いが重要

補修・修復が第一の保存方策でないのであれば、何が重要で基本的な方策か。

それはケアと取り扱いである。これには資料の保管環境の整備、ドライ・クリーニング（塵・埃・虫糞の除去など）、IPM（総合的有害生物管理）、書庫内配架、閲覧時の取り扱い、展示・複製（デジタル化など）時の取り扱い、セキュリティー、防災計画等が含まれる。いずれも資料がこれ以上の劣化損傷を受けないようにするための対処で、一言で言えば「防ぐ」保存策である。以下、幾つかの項目について説明する。

保管環境：調査した和古書コレクションの保管環境について言うと、貴重書室、特別室、特性キャビネット内等に収納されている場合は温度、湿度、照明、換気において大変、良好である。一方、そうでない場合は、外光に曝されている書架、紫外線防止無しの人工照明、温度・湿度の変動など、保管環境として危惧されるケースが幾例も見られた。

外光対策としてはシャッターやカーテンによる遮光で対応可能である。一方、温度・湿度調整は、書庫全体の管理運営に関わることで施設のにも財政的にも難しい場合が多い。そうであっても、次の2点は実施可能であり、検討すべきである。1) 現在の和古書保管場所の温度、湿度を継続して測定すること。これは従来型の自記温湿度計あるいは最近、普及のデータロガーで容易に実施可能である。書庫内環境を「知る」ことがまずは重要である。2) 保存容器収納による小環境整備を行うこと。(次項参照)

容器収納：保存箱などの保存容器に和古書を収納する方策は、大環境の整備が難しい場合、特に効果的に機能する。保存箱により、外光は遮断され、温度・湿度変化は抑制される。特に相対湿度の安定性が著しく向上する。塵・埃の被害からも守られる。

また保存箱収納は次の点でも効果を発揮する。

和装本(4つ目綴じなど)は元来、横置きするものとして作製されている。明治以降、欧米方式に倣って日本の図書館等でも書架に縦置きすることが多くなったが、その場合は帙入れが必須である。帙無しの裸の状態の和装本を縦置きにはできない。にもかかわらず、それを採用している在欧和古書保存図書館が見られる。その場合、しばしば和装本が歪曲している。それを是正する1つの方法が保存箱収納である。この場合、伝統的体裁である「帙」である必要はない。あるいは和装本の両側(表と裏)にアーカイバル・ボードを充てて紐で結える簡便な方策でも良い。

和装本が多くない場合、バラバラの和装本を所管している場合などでは、1点(1タイトル冊あるいは1冊)ごとに容器に収納する必要はない。大きめの保存箱を用意してそれに複数点を収納するので充分である。

取扱い上の知識：和装本の取扱いについては、卷子装含め、一般的な洋装本とは異なるので、担当の司書にその基礎的知識が求められる。そのことを資料利用者、他の職員、複製(マイクロ化、デジタル化など)担当者等に伝達、教育する必要がある。マイクロ化、デジタル化において縦書きの和装本を横書きの洋装本同様に複製したため、書物・文書の順序が逆になっているケースが良く見られる。和装本取扱いには留意が必要である。

防災計画：資料の防災計画を用意していない図書館が少なくない。貴重書の長期保存において、資料防災計画は欠くことができない。とはいえ、これは親組織(例えば大学図書館)の方針と取組みにもよるので、直ぐには用意できないかも知れない。

であれば、親組織に資料防災計画策定を働きかけるとともに、もし万が一、火災あるいは水害が起きた場合、貴重な和古書コレクションはどうなるか、その際にはどのように対処すべきか、等の想定をしておく必要がある。

その一環として、マイクロ化、デジタル化などにより和古書を複製した場合は、マスター・ネガ、マスター・ファイルは原資料保管場所とは別所で保管するなどの危険分散策も検討すべきである。

挿入紙の扱い：和古書コレクション中の資料にメモ書きが挿入されているケースがしばしばある。メモ書きは和書収集家によるものも、後に図書館で受け入れた場合のものもある。特に収集家によるメモ書きは歴史的に重要であるが、その素材が酸性紙かつリグニン含有紙であることが多い。新聞紙程度の劣悪な紙の場合もある。それらを本に挿入したままにするのは、酸やリグニンが本紙に移動(マイグレーション)し、原資料に悪い影響を与える。

とはいえ、収集家の書入れそのものは重要である。こうした場合の解決策(の1つ)は、メモ書き紙を挿入したまま当該箇所を写真撮影し、その後、メモ書き紙を本から外して別に(例えば封筒に入れて)保管する。該当の和古書にはこの処置記録と写真を付し、資料利用者・研究者の用に応える。

4.3 複製も重要な保存策

複製（代替）も重要な資料保存策である。複製物を利用に供することで原資料の保存が図られ、かつ4.6で記すように「利用のための保存」に威力を発揮する。

以前よりマイクロ化を実施している図書館は少なくないが、今後は、デジタル化を主軸に計画を練ることになるだろう。この点で、ベルリンで和古書約600点をデジタル化しHPで公開している事例、セインズベリーで古地図等デジタル化プロジェクトは優れた活動の一例である。また、UCLでは大学図書館デジタル図書館プロジェクトの一環として挿絵本和古書約50冊を自前でデジタル化し、HP公開している。この計画と手法は他図書館の参考になろう。

セインズベリーは立命館大学アトリサーチセンターと協力して和古書デジタル化を実施したが、デジタル化計画進捗のため、他機関との連携協力も追求すべきであろう。この点は、複製後の活用面の向上策にも関わってくる。

4.4 コレクション全体を視ること

和古書保存にあたっては、傷んだ図書だけでなく和古書コレクション全体にフォーカスを宛てて取り組むことが肝要である。「防ぐ」保存では、傷んだ資料もそうでない資料も対象となる。また保存処置の選択肢（例えば保存箱収納、デジタル化など）を検討する場合も、全体的な保存処置の優先順位を考える場合も、コレクション全体を視野に置かねば適切な判断ができない。

各図書館で和古書等を受け入れ・収蔵することになった資料群ごとの経緯を調べ、整理しておくことが重要である。それが為されている館もあるがそうでない館もある。いつ、誰から等の受入れの経緯は資料群の価値判断にも関わり、また保存上、留意すべき点は何かの示唆（例えば書入れの意義等）を示してもくれる。

コレクションによっては、他の機関に分散して所蔵されていることがある。オスロでは、大学博物館が同一コレクション中のモノ資料及び版画類を所蔵している。こうした場合、分かれたコレクションを同一のものとして視ることも肝要であり、物理的に分散していても、目録・メタデータ・レベルでの連携、デジタル化による統合も考えられる。

こうしたコレクションが各所蔵図書館にとって、あるいは各国・各地域にとって、どういう意味と意義を有するか、も思慮すべきである。そのことは今後、館外から古書類の寄贈などを打診されるような場合に、円滑で賢明な対応を可能にしてくれる。

さらに言えば、スロヴェニアで実施しているような国内文化財調査など、自館で所蔵していない各国・各地域内の和古書コレクションに関心を持ち、必要な場合には連携を思慮すべきであろう。それが外部から各館への「寄贈」「寄託」に繋がることも予期される。

4.5 アーカイブズ資料の扱い

前述のとおり、これまで和古書コレクションを日本関係の古書、手稿、地図、版画、写真等を意味するものと定義してきた。しかし、この用語定義は修正を強いられているように考える。というのは、この定義では日誌、書簡、原稿等のアーカイブズ的資料（文書）に対し、十分な取組みができないからである。これらの資料群の最大の特徴は「唯一性」である。つまり、これらは世界中の他のどこにもない資料（群）であり、その点、どれほど貴重であっても印刷物の場合とは異なる。

日本研究図書館は、上述のようなアーカイブズ(資料)をしばしば、所蔵している。

「EAJRS 和古書保存アンケート調査」では「20館中8館」が手稿資料を所蔵していると回答している。今回調査の場合のセインズベリーの Carmen Blacker コレクションやチューリッヒの Heinz Brasch 教授原稿などがその代表格である。これら手稿資料の歴史的、文化的、学術的価値は様々だろうが、一般的に言えば、その「唯一性」のために高い価値を有する場合が多い。

この種の資料群は、保管・保存上は、一般的な貴重書・和古書と同じ扱いでよいが、他の面（受入れ、整理など）では別の扱いが必要となる。アーカイブズ資料に相応しい受入れ整理等をせねばならず、そのため司書がアーカイブズ学の基礎を学ぶ必要も出てくる。

以上を考慮すると、今回の調査では、アーカイブズ資料も含めて和古書コレクションと称してきたが、それは適切でないようだ。この定義では、資料の取扱いにおいて過誤が生まれ易くもなる。それゆえ、アーカイブズ資料を含める場合には、「和古書コレクション」より「日本関係特別コレクション」がより適切な括り方ではないだろうか。

4.6 利用のための保存

近年、資料保存を「現在と将来の資料の利用を保証する営為。資料を保存するのは、将来に亘りそれを利用できるようにするため。」とする理解が共有されるようになってきている。保存と利用は図書館の別に任務ではなく、双方は1つに結びついた任務である。

在欧和古書等についても同様で、であれば和古書保存にあたっては、存在（価値）を広く認めてもらうようにすること、利用が促進されるようにすること、が重要な保存策である。

そのために必要な第一は目録整備・検索手段の整備である。この点、目録整備が途上あるいは不十分な図書館が見られるが、外部資金を獲得することも含めて精力的に目録整備に取り組む必要がある。また整備された目録は検索が容易になり、幅広い検索が可能になるよう努めねばならない。この点、ベルリンがコーニッキ版目録への統合を追求しているのは極めて重要で優れた努力と評価される。

展示やデジタル化もコレクションの存在価値を広く示す良い機会である。UCLは歴史的に特別の和古書コレクションを有するが、それらの展示及びデジタル化に積極的に取り組んでいる。これも見習うべきコレクション活用の事例である。

4.7 点検と評価

点検はケアの一面であり、「防ぐ」保存策の重要な項目である。

資料保存上の点検の内容は、1) 資料の保存状態、虫・カビ被害の有無など、資料そのものの点検、2) 保管環境、となる。

1) は個々の資料とコレクション全体の両面で理解する必要がある。2) は温度、湿度、照明、換気のほか、セキュリティ、つまり盗難、紛失の危険性の有無のチェックなどが含まれる。

以上は日常的に必要な点検項目だが、特に、例えば年に一度、全体的なレビューを行うのが効果的である。継続して実施している温度、湿度測定の結果を1年分まとめて整理し、前年結果と比較するなどする。

一般的には資料保存上の点検は以上の項目となるが、在欧和古書コレクションについては、次の項も含めるのが望ましい。1) 保存箱収納、2) デジタル化などの複製、3) 目録の整備状況、4) 利用・活用実績、5) 展示。

これらを「和古書の日」あるいは「和古書保存の日」とでも呼称して、一日あるいは半日を費やして和古書点検に専念する。そこで、過去1年の環境調査の結果、種々の実績等をチェック・シートなどにより掌握する。と同時に、これからの1年の展望を描くようにする。将来展望では、目録整備の計画の進捗、保存箱収納計画、利用促進の方向、展示やデジタル化の機会追求、スタッフの保存学習等を含むことになる。

日本研究司書は、日常的に広範囲の任務に追われる。それゆえ、和古書の貴重性、重要性を理解しても、それに日常的に時間を割くことはなかなか難しい。であれば、1年に1日でも日を決めて、和古書（日本関係特別コレクション）保存の課題に専念する。そうすれば、様々な機会—例えば外部資金獲得、デジタル化、展示、スタッフ研修など—が巡ってきたときに、その機会を逸せずに取り組むことが可能になる。あるいはこれらの機会を呼び寄せることができる。貴重資料の認識向上に繋がる資料紹介発表の

機会を検討することもできる。

またこの種の取組により、仮に担当司書に異動があっても、部署として計画の継続性が維持できる。

和古書の保存点検に、過去1年のレビューと今後1年の展望を含めることにより、継続的で積極的な保存対応が可能になる。これらを簡易・短小でよいから「文書化」することも考慮すること。

4.8 連携協力が重要

連携協力が重要であることは資料保存に限らないが、とりわけ在欧和古書保存における連携協力の改善、開発が期待される。

日本研究図書館は一般的に専門図書館的で、その分、独立性が高い。そのためか、資料保存関連では幾分、孤立しているように見受けられる。

大学内の場合でも、保存処置、施設管理、防災計画等で、親組織である大学（中央図書館）との意思疎通、連携協力は不可欠である。これらの点、改善の余地はないだろうか。

他方、和古書の保存処置では、大学図書館等では4つ目綴じの書物などは扱えず、そことの連携は難しい。ここで頼りとすべきはヨーロッパの他の日本研究図書館である。ポドリアンは和装本の保存処置に優れた知識、見識、経験を有する。ベルリンやUCLはデジタル化の良い経験を有する。そうした知識と経験に学ぶこと。言い換えれば、和古書保存に関する知識と経験が欧州内で共有できるようにすることが重要である。

国によってはアーカイバル・ボードの調達や保存箱作製が難しいとも聞く。しかし、これらは図書館だけでなく博物館、公文書館でも広く使用されている。必要な場合は国内のそうした機関に尋ねることも必要である。

要は、一人で悩み苦しむのではなく、広く情報交換、経験交流することである。それが多くの日本研究図書館で日常的にできるようになれば、和古書保存は大きく前進できる。

5. EAJRS の役割—今後に向けて

以上、各和古書コレクション（日本関係特別コレクション）所蔵図書館において参考にしてもらいたい点を整理して述べてきた。最後に、和古書保存において EAJRS に期待されることをまとめて述べたい。

EAJRS では既に和古書保存 WG を立ち上げて活動している。しかし同 WG の活動は発展途上であり、今後の精力的努力が期待される。HP（ブログ）内容も未だ不十分で、その内容の大幅な拡充が必要である。

それ自体は、第一には、私を含む WG メンバーの課題であるが、一方、EAJRS メンバーには積極的な WG 活動への関与が要請される。それは WG ブログあての和古書保存に関する単純な問合せでも、あるいは自館での実践事例のブログ掲載でもありうる。そうした参画により、WG 及びそのブログが発展できる。

EAJRS に対しては、和古書保存テーマでの研修・セミナー等の企画も期待される。和古書保存アンケート調査でも保存研修等への期待が多く寄せられた。ヨーロッパ内で、EAJRS 年次大会に合わせてでも、この種の研修・セミナーの開催を期待したい。

研修・セミナーのテーマを本報告で挙げた項目から拾うと、1) 種々の保存容器の作製（裸の和装本を書架に縦置きに収める方策を含む）、2) 簡単な（司書がして良い範囲の）和装本補修のトレーニング、3) 和装本の書誌的、構造的知識、4) 和装本デジタル化の基礎知識、5) 書簡、手稿、日誌、原稿等のアーカイブズ的資料群の目録の取り方、などが挙げられる。講師陣は欧州内から招請できる。必要であれば日本からの招請も考えられる。

なお、和古書保存等保存のための訪問調査を、EAJRS が再実施することへの期待が寄せられている。但し、それは、1) 一定規模の訪問調査受入れニーズがあること、2) 調査実施のための経費捻出が可能であること、が条件となる。